D 12　民家における家具の特性―川崎市民家の場合―

昭和女子大家政　○竹田喜美子　磯野さとみ

目的　本研究は、開放的な空間の住まい方のメカニズムを立面から追求しようとするものである。室内の立面を構成する要素として、建具と家具を取り上げる。昨年の大会では開放的な住まいである民家の建具の特性について報告したが、今回は家具の特性について考察する。家具は、人間と空間を結びつける媒体の役割を担うものであり、その機能は多様であるが、ここでは、開口面に配置された家具について検討する。

方法　川崎市に現存する茅葺民家18戸を対象に、現状平面・家具配置等の採集・写真撮影並びに住まい方の聞き取り調査を実施した。調査期間は昭和61年8月である。

結果　1)調査民家は大部分、江戸後期以降に建設された整形四間取り農家である。2)家具は開口面を塞ぐ形で配置されるが、家具が集中する面と、そうでない面とがある。採光・通風・視線の必要度によって決定される。家具量は室によって異なるが、室の機能との関わりが深く、特に<就寝>と<団らん>が行われる室に多量傾向がみられる。3)開口面に家具が配置されると通路の機能が阻害されるが、各室の確保された通路口の幅員と位置は、室の機能と動線の関係による。4)家具が配置される開口面は、家具の高さによってその開放度に差が生じる。背の高い家具が多い面、低い家具が多い面、家具の高さが異なる傾向が強い面など、段階的に分類することができる。5)床上四室に収容しきれない家具が縁側にまではみ出す傾向がみられる。6)開口面に置かれる家具は、室の機能から求められるプライバシー度や採光・通風・視線の必要度に対応して、位置と高さが設定される。民家における家具は、空間を仕切る機能が強く、家具高さで空間の開放度を調整する。